

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

笑顔恐怖症のあの子と笑顔依存症の彼女

松任中学校二年 澤田さわだ 祈幸きさき

私はいろんなところに行った。親を交通事故でなくしてから、私は親戚やら親の友達のところをまわった。だけど、いつも聞くことは、

「嫌やよ。家にまわしてこないで！」

「こつちだつて家族で精一杯なんだよ。」

「そんな不愛想な子じゃないわよ。」

：親をなくして知らない子扱ひされて、どうして笑つていられると思うのだろうか。たいていの大人は笑つて接してくれるが：演技が下手すぎる。幼い子供の私でも表だけの笑顔だと分かる。大嫌いだ。

だけど、一度好きになつた人がいた。やさしい笑顔で頭をなでてくれたあの人。けれど：あの方は：

目が覚めた。古そうな小さな部屋の中央だつた。目の前には雨漏りの跡がついた天井。布団から出る。目覚まし時計はないけど、いつも自然と目が覚める。きつとこの家にいたくないという思いから、自然と目が覚めるのだろう。制服を着て、顔を洗い、髪を結ぶ。いつも朝ご飯は食べない。こうして一人家を出る。

夏だつたがふく風はまだ涼しい。左右の二つに分けた長い髪が揺れる。いろんな家に行き、あの人に会い、その後は、今住んでいる杉木さんに世話になつてゐる。もう他の家に行くことはない。大人だけの話し合いの結果、私は一生杉木さんの家に行くことになつた。と言つても、杉木さんが死ぬまでだけど。杉木さんは年のいった夫婦で、おじいちゃん、おばあちゃんといった感じだ。二人は朝遅く起き、夜は早く寝るといふ生活だ。体力ももうあまりないんだろう。それに、無理やり私の世話をまかされたんだろう。相当嫌だつたんだろう。初めて会つた時も作り笑顔もなかつた。でも、だまされないうちにはそつちの方がまだいい。もちろん私も笑わなかつたけど。というより、もう笑えないんだだけ：

学校に着いた。山の中の小さな学校。全校生徒15人の本場に小さな学校。私はその小学4年生。クラスの人数は9人。この学校で一番人数の多い学年。2年3人、3年2人、5年1人、1年と6年はいない。

なぜか4年だけ人数が多い。女子5人、男子4人だ。教室に入る。

「もうそろそろ返してよ。」

「いらないでしょ。こんな汚い筆箱。」

と一人の女子が親指と人差し指で泥でべちよべちよになつた筆箱をつまみ上げる。

「いるよ。鉛筆とか入ってるんだよ。」

といじめられてゐるのに、にこにこ笑いながら話す明るめの茶色の髪を横に一つにまとめた女子。松原結。彼女は何かあつてもにこにこ笑う。今だつていじめられてゐるのに、笑顔だ。私は彼女が嫌い。いや、きつと怖い。笑顔があの人に似てゐる。彼女を困らだいじめっこ女子3人組。林道風香、石田真由、岸野美奈。石田の手にはゴミ箱。それを彼女めがけて、

「朝礼始めるぞー。座れー。」

と先生が入つてきた。石田はチツと舌打ちをして席につく。彼女を見る。彼女はまだ笑つてゐた。

男子は廊下に出て、

「誰が一番に運動場につくか勝負やぞー!!」

とやたら大きな声で叫んで走り出す。その後を男子3人が追いかける。女子3人組は昨日のテレビの話しながら、教室を出る。そうか、次は体育か。体育袋をランドセルから出す。

「天音さん：天音ゆずかさん。」

ふいに後ろで声が出た。振り返るとそこには、彼女。松原結がいた。

「天音さん。一緒に着替えに行こ。」

にこにこ笑いながら彼女は言う。私が無言で歩くあたりまえのように隣に並んでくる。そして、一人どうでもよい話をしゃべってくる。来ないでほしい。迷惑だ。彼女はあのいじめっこ3人組がいない時はいつも私のところにくる。私は彼女を怖がっているのに。でも、いつもにこにこ笑つてゐる彼女をうらやましくも思うときもあつた。ほんの時々。

「さようなら。」

「はい、さようなら。お前ら気をつけて帰れよー。」

終礼が終わり男子はいつせいに走って帰っていった。女子は今日掃除当番。女子と男子で交替をして放課後掃除する。けれど、3人組は

「ごつめくん。私ら今日美奈の家でゲームする大っ事な予定があるからあんたら2人でやっとして〜。」

と林道は言う。まるで女王様だ。

「別にいいよね。」

と美奈は彼女をにらむ。すると、もちろんとも言うように彼女は、

「分かった。2人で掃除しとくよ。」

とにこにこ笑った。

「ほんつとあいつ使えるよね。今度から私らの宿題もさせる？」

「マジか。めっちゃいい〜」

「ムリムリ。あいつの字汚いもん。」

聞こえる声で教室を出ていく3人。彼女も聞こえているはずなのに、

「じゃっ掃除しよっか。」

なんで笑っているのだろう。

大きなゴミ袋を抱えて運動場に行く。これはいつも私が一人でやってきたことなのに、今隣には彼女がいる。ゴミを出しに行くのについてきた。一人でいい。

「重そうやね。持とつか。」

「いい。」

これで3回も同じことをきかれた。一人で持てる。ついてこなくていい。それを伝えるため、さつきから「いい。」と冷たく言っているのに：分かってくれない。

うんざりだ。彼女を横目で見る。笑っている。いつもいつも笑っている。いじめられていても。怒ったり、泣いたりしない。見たことない。

あの人の笑顔に似ている。でも、どこか違う。そう考えていると、気づ

いたら、

「なんでいつも笑っていられるの。」

そうきいていた。運動場にある大きめのゴミ箱にゴミ袋を捨てるため、歩いていたら、気づけばもうゴミ箱の前。ゴミを捨てる。彼女の目を見る。いきなりの質問に少し驚いているようだ。でもすぐ笑顔になる。

「自然と：なるんだよ。」

それだけ言った。

「ふくん。」

他に何を言えいいのか分からない。すると、

「天音さんは：笑わないよね。」

彼女から言ってきた。

「楽しいことがないから？つまらないから？」

ただそれだけを言っただけなのに。それなのに、私は今、怒りでおかしくなりそう。私が笑わない、笑えないのはそんな簡単なことじゃない。お前達と違って、私は、私は、ブツツと何かが切れるような音。私は今怒りのこもった目をしているはずだ。口が：勝手に動く、

「私はお前達と違って、苦しいことであふれていた!! 親がいなくなり周りの大人達からはじゃまにされて、そうやって生きてきた!! 学校が楽しくないから、つまらないからとかそんな簡単な理由じゃない! 私はいいつら、あの大人達のあの人の笑顔が怖いんだ!! 表だけのあの笑顔が。だから怖くて笑えない! 笑っている人が怖い!! 私は、私は：。」

涙が一粒こぼれた。

「私は：笑顔恐怖症だ。」

怒りでついわつと言ってしまった言葉。自分で言って胸が苦しくなる。

涙があふれた。

「そう：そうだったんだ。」

彼女は、そう言った。怒ってこないし、バカにもしない。なぜか落ち着

いている。彼女は私の目を見ると、

「実際、私は天音さんに、あなたにあこがれていた。仲良くしたいと思っ
た。」

残念そうにけど笑顔のまま下を向く。

「でも…無理みたいだね。あなたは笑っている人が怖いんですよ。私は
ね…。」

彼女はこちらを向く。

「私は…私は笑顔依存症なの。」

悲しそうなさみしそうな言い方だった。だけど彼女は…笑っていた。

私、松原結は5歳の時に親を亡くした。幼くて、両親の死が悲しくて、
寂しくて、悲しくて、誰よりも大きく泣きわめいていた。棺にくっつい
て大泣きした。周りにいた大人達は何も言わなかった。「うるさい」と怒
らなかった。ただ、「可哀想に」と見ていた。けれど、一人の女性がこち
らにつかつか歩いてきて、

「うるさい子だね。静かになさい。まったく迷惑したらありやしない。」
少々しわはあるが、白い肌の高い鼻、大きく透き通るような目をした美
しい女性。母の母。私のおばあちゃんだった。私はおばあちゃんの家に
住むことになった。その暮らしはとても厳しかった。朝は5時に起きて
掃除、朝ご飯の準備。いつもおばあちゃんは私のすること全てに注意し
た。

「もっと強くぞうきんをしぼり。」

「ほこりが残っているでしょ。」

「卵焼きがこげるじゃないか。」

いつもいつも言っている。そして、普通の子より一時間以上早く家を出
る。みんながくる間、私は一人勉強をする。100点を取らないと怒ら
れてしまうから。家に帰ると、ご飯を作ったり、洗濯、風呂掃除をして
三時間は勉強させられる。だけど、何よりつらかったのは…お父さん、
お母さんが亡くなってすぐのこと、あいたくて、あいたくて、でも、あ

えない現実が痛くてつらくて、泣いていた。

「うとうとお父さん…お母さん…あいたいよ、あいたいよ、うとうわ
ん。」

すると、おばあちゃんは私のそばにくると、

「静かになさいよ泣くんじやないよ。こつちが迷惑なんだから。住まわ
せてやっているんだから、困らせんじやないよ。」

そう冷たく言い放った。のら猫にひっかかれて、血が出て痛くて泣いて
いた。おばあちゃんは私の手に包帯を巻きながら、

「今手当てしてやっているだろう。だまっていなさい。泣くんじやない
よ。」

でも、痛いと誰でも涙は出るものじゃないの。そう思った。私がいじめ
られはじめたのは、小学2年生の頃、朝早く学校で勉強をして、100
点しか取らなかった私のことをひどくにくんだのか、いじめられた。怖
かった。涙があふれた。とめようと思っても、あふれ出てきた。おばあ
ちゃんに、助けを求めた。本当は誰でもよかった。なぐさめてほしい、
いじめから救ってほしい、そんな思いで相談をした。だけど、

「あなたが泣くと、本当にブスだ。こんなブスを見たことがない。せめ
て笑っていなさい。あんたがヘラヘラ笑っていればバカらしくていじめ
もしないさ。ははっ。」

そう言って笑った。その日からとにかく笑った。つらくても悲しくても
痛くても怖くても泣かなかった。笑った。ただヘラヘラ笑った。だんだ
ん悲しくても笑えるようになった。泣かなくなった。そして…泣けなく
なった。笑うことしかできなくなった。だけど、いじめはどんどん激し
くなっていった。物を隠されたり、服を汚されたり、ついにはトイレの
ドアの上からバケツに入った水を思いっきりかけられた。びちよびちよ
になって、ドアを開ける。

「もう、びっくりしたじやん。」

自然と出た言葉だった。知らない間に笑っていた。そんな時、一人の子

が転校してきた。整った顔立ちに細めのきれいな体。サラサラの髪に大きな目。天音ゆずかという。いつも一人で笑わない。自分とは対照的だった。だから気になった。そして、そのうち笑わないあの子がうらやましくなった。自分の意志で笑わない。私は今もつらくても笑ってしまうの。仲良くなりたかった。あの子になりたいものすごく思った。そして今、あの子は自分の本音を言ってくれた。私と似てないようで、似ているかも知った。私は泣きたくても笑ってしまう「笑顔依存症」。そしてあの子は笑いたくても笑えなくなった「笑顔恐怖症」なのだろう。目の前のあの子は手をぐっと握りしめ、なぜか震えていた。そしてこちらをにらみ、

「なんで笑えるんだよ。どれだけ気楽なやつなんだよ!! いいよ。あんたは本当にいい人生だよ。笑いたくなくてもわらってしまっつてサイコーだね。こっちは…こっちはもう笑えないつてのに。」

そう叫んで走っていった。目には涙がたっぷりあった。その様子と言った言葉がすらく、痛くて追いかけれない。「笑いたくなくても笑ってしまっつてサイコーだね。」…本当にサイコーなの？ だつて私今も笑ってしまっているんだよ。こんなに今心はボロボロなのに。

「苦しい。」

それだけ言った。笑顔のまま。

「ハアハア。」

息が切れた。体育倉庫の中にいる。笑顔でいられるのにまるで自分は可笑みたくない言い方するなよ。私は笑えないのに。彼女の笑顔を思い出す。やわらかい自然な笑顔。だけど心からは笑っていない。多くの人の表だけの笑顔を見てきた私には分かる。けど、かわいそうなんて思わない。あの人を思い出す。彼女にそっくりな笑顔。胸が痛い。握りつぶされるような痛み。涙があふれて、とまらない。目をつぶる。目の前は暗闇となった。

あの人私は杉木さんの家にくる前に住んでいた家の人。桃井春とい

う。

「いらっしやい。今日からよろしくね、ゆずかちゃん。」

そう言っつて頭をなでてくれた。まぶしいくらい笑顔だった。他の人とは、今まで見てきた大人達の笑顔とは違つて、自然だった。いつも笑顔で実の娘のようにやさしくしてくれた。好きになった。お母さんのような存在になった。こうして一カ月がたつた。夏の日だった。いつのまにかクーラーは切れていて喉はカラカラだった。階段を降りて水を飲みにかこうとする。そこで部屋から聞こえてきた声。

「もうあの子はいらないわ。最近なんかベタバタくつついてきてキモいのよ。良介さんに似ているのかと思つていたけど、全然似ていない。優月そっくりで、腹が立つてしかたがないのよ。」

何かわからなかった。でも、段々と理解してきてしまった。涙をこらえて二階へ行く。ベッドに入り、声を押し殺して泣いた。泣いていて思い出した。小さかったけど覚えているお母さんの話し声。親友の話だった。春という中学生からのつき合いの親友がいたそうだった。春はお母さんと同じ人を好きになった。それがお父さん、良介だ。結局、お父さんが選んだのは、優月。お母さんだった。それから、春とはうまくいかない日が続いたと言つた。けれど、お母さんは「また春としゃべりたい。」と勇気を出して言つたそうだった。「そうしたらね、春はやさしかったから、私とまた仲良くしてくれたのよ。」うれしそうなお母さんの声を覚えている。だけど、桃井さんはまだあきらめていなかったんだ。きっと、お母さんが知らないところでお父さんにアタックしていたはずだ。でも、たぶんダメだったのだろう。そして、良介さん、お父さんのことが大好きだったんだらう。私が良介さんに似ていることを願つて私の世話をすると言つたのだから。だけど、私は小さい頃からお母さん似と言われる、美少女だったらしい。だから…私をいらなくなつたんだらう…。桃井さんは私のことを好きだったんじゃない。もういない良介さん、お父さんのことが好きだったんだ。

「ごめんね。私はゆずかちゃんはずっと一緒にいたかったけど、話し合
いで杉木さんの方がいいって決まったの。ごめんさいね。ゆずかちゃ
ん、元気でね。」

そう言つて、頭をなでた。だけど、ひどく冷たく重たいものに思えた。
…嘘つき。

目を開ける。暗い倉庫の中。暗い過去を思い出して、気分は最悪だっ
た。この世から消えてしまいたい気分だ。気づくと杉木さんの家にいた。
どうやって帰ってきたか覚えていない。泣いた跡がくつきり残った目を
していた。だけど、杉木さんは何も聞いてこなかった。心配ももちろん
しなかった。布団に入る。一日が終わる。

「つらい。」

そう言つて目を閉じる。暗闇だった。

一人道を歩く。いつもどおりの朝の道。もう少しで学校に着く。でも、
そこにはいつもは見えないものが立っていた。彼女だ。こちらに気づくと、
いつもと同じ笑顔で、

「少し話さない？」

そう言つた。だけど…今は彼女の笑顔を見たくない。

「嫌。」

無言で歩く。彼女はあきらめずについてくる。

「何で？」

「どうしても。」

「意味分からないよ。」

何で分からないの。それは昨日お前が私のことを傷つけて、思い出した
くない記憶を思い出させたからだ。イライラする。

「分かるように説明してよ。」

「お前には一生分からないっ!!」

昨日より大きな声で叫んでいた。だけど、彼女の表情は変わらず笑顔だっ
た。

「親がいなくなつてから、誰にも愛してもらえなくて、いつも一人で。
笑いたい時だつて、私にだつてあつた。でも、もう笑うのが怖くなつて
笑えなくなつていた。いつも笑っているお前には分からないっ!!」

「じゃあ、ゆずかちゃんは泣きたくても泣けなくなった私のことなんて
分からないね。」

「はっ…何それ。」

「笑いたいのに笑えないのはすごくつらいと思う。でも、泣きたくても
泣けないのも同じくらいつらいと思う。違うかな。」

考えたことがない。だから、急に言われてもわからない。

「ゆずかちゃん。私、たぶんゆずかちゃんに似ていると思う。だから、
思い切つて、私の過去の話をしようと思う。だから、ゆずかちゃんもゆ
ずかちゃんの過去を話して。私は、ゆずかちゃんのことを知りたい。」

口元は笑っている。だけど、目は真剣だった。そして、彼女が語つたこ
とは、想像もしていなかったこと。親がなくなり、つらくても泣けない

ようにされ、無理やり笑わされていたこと。

「だから、私はもう泣けない。」

そう最後に言つた。次は私が話す番だった。

昨日家に帰りながら思つた。ゆずかちゃんは分かってくれなかった。

まあ、「笑顔恐怖症」のあの子は「笑顔依存症」の私のことなんて分かる
わけないけど。泣きたくても笑つてしまう私のつらさなんて、何も。一
人道を歩く。今の笑うだけの私をつくつたおばあちゃんのいる家へ。私

はきつと、世界で一番可哀想な小学生だ。誰よりも。

「でも…。」

足がとまつた。私はものすごくつらい思いをしている。だけど、あの子
だつて私が知らないものすごくつらい思いをしているのかもしれない。

分かるわけない。そう思っていたけど、分かるうとしていないのは私、
分かつてもらおうとしていないのも私だ。それなら、いっそあの子に私

の過去を話そう。分かつてもらおう。そして、あの子の過去も話しても

らおう。それで、分かってあげよう。そう決意をした。

今、あの子の過去を詳しく知った。思っていたよりもずっと悲しくさみしい過去だった。あの子が私を嫌いでも怖くても仕方がないと思った。あの子も私と同じくらい可哀想な小学生だった。あの子には、私と桃井さんが同じように見えるんだと分かった。あの子が言ったんじゃない。私の考えだ。自分が笑わされている分、他の人が心から笑っているのか、表だけで笑っているのか分かるようになった。桃井さんも表だけで笑っていた。だけど、その笑顔は自然すぎたのだろう、私と同じで。普通の人なら分からないだろう。だけど、桃井さんにだまされていたあの子は私の笑顔も同じように見えたはずだ。あの子は笑っている人が嫌いだ。だけど、桃井さんと同じ笑顔をやる私はもっと嫌いだったのだろう。私は今までどれほどあの子を、ゆずかちゃんを傷つけていたんだろう。考えれば考えるほどつらくなる。

「あなたのこと…誤解してた。」

ぼそつと言ったあの子の言葉。だけど、しつかり聞こえた。

「あなたもつらかったんだね。ごめん。分かってあげられなかった。心が温かくなるのを感じた。」

「ううん、ううん、全然いいの。私も分かってなかったから。だから、今日話したんだよ。」

首をぶんぶん横に振って話す。やっぱり、やっぱり分かりあえたんだ。そうだよ、同じ人だもん。言葉通じるもん。私は今笑っている。でも、心から笑っている。何年ぶりだろう。心から笑えるなんて。

「あつ時間…。」

「あつ本当だ!! ヤッヤバツ行こう。」

今、あの子と、ゆずかちゃんと走っている。足の長いあの子は足が速い。でも、今あの子はとろい私と同じ速さで走ってくれている。それが、こんなにもうれいというを生まれてはじめて知った。

私はあの日から彼女のところにいくようになった。分かり合えたこと

が何だかすごくうれしくて、全部話した時ずっと心が軽くなった気がした。彼女が過去を話して、自分のことを分かってくれたことをうれしく思った。彼女も私がいくと、ものすごくうれしそうに笑った。私は笑う人が怖かった。でも、きつとそれは表だけの笑顔の人が怖かっただけだ。だから、彼女のあの笑顔は私は好きだ。安心できる。一緒にいたいと思っただけだ。だけど、最近、彼女の様子がおかしい。笑顔がぎこちない。楽しそうにしくなくなった。でも、怖いとか嫌いだとかは思わなかった。不安で心配だった。彼女にはひどいことをたくさん言った。何も知らなかったくせに。それなのに、彼女は私を救ってくれた。「今度は私が助けたい」と生まれてはじめて思った。放課後、

「話したいことがある。」

不器用だけどいえた。彼女に最近元気がないのはなぜかをきいた。すると、返ってきた答えは、ひどいものだった。

「おばあちゃんがね、最近あんなは幸せそうに笑うからにくらいんだって。こっちはあんたの世話させられているのにつて。」

彼女はおばあちゃんに泣くことをできなくさせられた。そして今は、笑うこともダメだと言われていた。信じられない。何で孫の自由を奪っていきけるのか。…最低だ。

今、二人で帰っている。でも、私の家とは逆方向の彼女の家に向かっている。彼女にはこなくてもいいと何度もとめられたがどうしても行かなければならない、そんな気がした。

「すみませんっ。」

ドアを勢いよく開ける。すると、部屋から整った顔立ちの女性が出てきた。「この人か」と怒りがこみ上げてくる。

「もしかして、この子の友達? こんにちは。いつもお世話になってるわね。」

声だけで分かる。そんなこと一つも思っていない。冷たい言い方。

「彼女に…結に泣くなと言ったのはあなたですね。」

結と呼んだのははじめてだった。

「何をいきなり。まあ、確かに言ったけど、それが何か？」

「何で泣いたらダメなんですか？ 悲しくてつらい時くらい泣いたっていいじゃないですか。」

「一体何なの。もう帰ってちょうだい。」

「嫌です。分かってももうまで帰りません！」
ここで帰るわけにはいかない。この人のせいで彼女の人生が狂うことになる。

「彼女は泣けなくなりました。悲しくてもつらくても泣けなくなりました。笑うことしかできません。それでも、彼女は前に進みました。心の底から笑うようになりました。だけど、今度はあなたはそれも奪おうとしている。もつと：もつと人を思いやりなさいっ。」

人のために、誰かのためにこんなことをするのは、はじめてだった。

「：本当ね。あなたが泣いているのを全然見ない。それに最近笑うことも少なくなっただような：。」

おばさんはやつと自分が今までしてきたことがどれほどのことなのかを知ったようだ。顔が青ざめている。

「あなた：結：私は結のことをしばらくつけていたんだね。ごめんよ。私の親も私のことをこうやってしばらくつけていた。だから、自分の子たちにはこんなことはしないと決めていたのに：ごめんね。ごめんね。苦しかったわよね。」

「おばあちゃん：うん、ずっとずっと苦しかった。胸が痛かった。」

おばさんは彼女を抱きしめる。強く強く。

「ごめんね。知らない間にこんなに大きくさせちゃって。」

おばさんは：泣いていた。

いつもより少し暗い帰り道。彼女は「少しだけ送る」と言っただけ送って来てくれた。

「ゆずかちゃん、今日は本当にありがとう。本当にうれしい。こんなに

幸せだと思った日はないよ。」

そう、うれしそうに笑った。だけど、まだだ。私は彼女をぎゅっと抱きしめる。

「今、泣きたいんじゃないの？ 今までの分思いっきり泣いたらいい。もう、泣いていい。結はもう、しばらく泣いていい。」

彼女の顔は泣きたがっていた。それが分かった。でも、まだうまく泣けないんだ。

「うつつ、ありがとう。ゆずかちゃんを友達だと思っただけだよ。」

「友達じゃなきゃ、こんなことしない。」

「あつありがとう。うつ本当に本当にありがとう。うわーん。」

子供みたいに泣いていた。子供というより赤ちゃんみたいに大声で。その日、私ははじめて、彼女の泣いている姿を見た。笑っている時よりも幸せそうに見えた。

私は、あの子のおかげで泣けた。すごく幸せだった。うれし涙を流したのは初めてだった。感謝の気持ちしかなかった。だけど、いつ頃からだろうか、「今度は私が救いたい。」そう思うようになっていた。「笑顔依存症」の私はあの子のおかげで泣くことができた。だけど、「笑顔依存症」の私はまだ笑えていない。あれだけ真顔でもあんなにも美しくみえるあの子なら、笑った顔はとびきりかわいだろうな。何としても私が救ってあげたい。

トイレに行こうとするあの子。その後ろ姿を見ている私。プランその1、単純にこちよこちよしてみる。そつと後ろにしのびよると、

「こちよこちよこちよ！！：てっあれ？」

今あの子はものすごく哀れんだ目でこちらを見ている。えっ何で。

「結：小4にもなって、こちよこちよ！！とか子供すぎない。ちよつとひく：。」

私の声マネをしながら言った。：バカにされた：。

プランその2、面白い話をする。

「ゆずかちゃん。昨日見たお笑いなんだけどね。すっごい面白かったからみてっ。」

「ごめん。寝坊したわ〜。」
走るマネをする私。

「ホンマや。どんだけ待ったと思ってるの。」
いすに座って腕組みする私。

「いや〜昨日72時間寝ちゃって。」
「3日も寝とるんかいっ!!」

とツッコミをいれる私。あの子は…あきれた顔をしていた。
「ごめん。どのへん面白い？」

「えっ…全部…。」
笑うと思ったのに…。驚きだ。あの子はポカーンとしたまま何も言わない。私はお腹抱えて笑ったのに…。

プランその3、変顔をする。
「でさでさ、そしたらすべって転んじやって。」

「どうしたらそうなるのよ…。」
今だっ。さっき鏡の前でやった変顔をする。少し間を開けて、あの子は真顔で、

「熱ある？」
と私のおでこに手をおく。変顔…面白いと思ったのに…。ショックだ。

あの子を笑わせるにはどうしたらいいんだろう。終礼中ずつとこのとばかり考えていた。あの子が笑えないのは、あの過去があるからだ。

じゃあ…まずそこをどうにかしないと…。きつとこれが一番正しい答えだ。

今、私は帰り道を逆に進んでいる。あの子の家へ行くためだ。前に聞いた。

「杉木さんに大切にしてもらってない。まあ、大切なのはムリもあるだろうけど…。でも、せめて家族みたいに…それがムリでも一緒に住

んでいる人として話し合えないかな？」

あの子は最近頑張って杉木さんに話しかけているようだ。だけど、全て無視だそう。それなのに、いくら私が頑張っても笑ってくれるはずがない。一人あの子の家へ向かう。

「今日は先に帰って。」
と先にあの子を帰らせた。放課後、一人教室で、あの子を助ける方法を考える。いろいろ悩んだ。杉木さんとどうにかしてあげたい。私とあの子と杉木さんで遊んでみて仲良くする。…迷惑だな。あの子が杉木さんとおしゃべりしてみる。…いや、もうやってるけど無視されてんだ。お菓子をあげる。物でついたらダメじゃん。も〜どうしよう。

「あつ。」
そう。私の時はあの子は私のために怒ってくれた。それが本当に正しいかどうかは分からない。だけど、すぐくうれしかった。思い出すと涙が出そうになる。私もそんな風に救いたい。

ピンポンとチャイムを鳴らす。
「はい？」

出てきたのはあの子だった。

「杉木さん…杉木さんに用があるの!!」
今私は杉木さんの家にいる。目の前には温かいお茶が出されている。机をはさんで目の前には杉木さん夫婦。隣にはあの子が座ってくれている。緊張する。でも、あの子を…助けたい。その思いが私の背中を押した気がした。

「率直にききます。杉木さんは、ゆずかちゃんが好きですか。」
「ちよつ結。」

とめに入ってきたがわざと無視をした。ごめん。どうしてもゆずかちゃんを助けたいんだ。

「どうですか？」
杉木さん夫妻は困っているようだった。

「ゆずかちゃんは、杉木さんと話しをしたいそうです。最近よく話しかけられませんか？ それを、ちゃんと答えてあげてますか？ 私は最近ゆずかちゃんと仲良くなりました。友達だと言ってくれました。ゆずかちゃんは私のことを大切にしてくれています。だから、ゆずかちゃんは杉木さんも大切にしようと思っただと思えます。ゆずかちゃんは：ゆずかちゃんは杉木さんと家族みたいになりたいんです。」

一気に話したので、息を整える。杉木さんは黙っている。すると、

「わたし達は、ゆずかちゃんを無理やりわたされた。死ぬまでめんどろを見ろと。わたし達はゆずかちゃんの遠い親戚で、名前すら知らなかった。会ったこともない相手を正直めんどろを見たくなかった。」

そう杉木さんは言った。そんな：。

「でも、会ってみたらすぐおとなしく可愛らしい子だった。だけど、前にもゆずかちゃんのように世話を任されたことがあったが、立派な不良とさせてしまった。そして、妻は殺されかけた。結局、警察に連れて行かれたが、周りの目がつらかった。」

殺されかけたって。おばさんの方を見ると：震えていた。恐怖の目をしていた。

「だから、わしらはゆずかちゃんを育てる自信がない。それに、ゆずかちゃんには悪いがわしらは怖いのだ。もう子供が：。だから、すまん。うまく愛してやれない：。」

「で、でも。」

「結、もういいよ。」

泣きそうな目をしていた。

今2人で山の上にいる。美しい景色を眺める。山の中に学校があるため、上に登るのは案外簡単だ。

「ごめん：。」

申し訳ない気持ちでいっばいだ。もう、消えてしまいたい。

「ううん、いいの。すごくうれしい。だけど、うまく愛してやれないっ

て。」

ぼろぼろ涙をこぼすあの子。何で：私の時はうまくいったのに：

「神様はいじわるだ。ゆずかちゃんは悪い事何もしていないのに。」

本当にやさしいいい子なのに：。

「神様のせいにしてもダメだよ：。」

誰かお願いゆずかちゃんを愛して。今まで愛されなかった分、愛してやって。

「私、もう愛してもらえないのかな：。」

ぎゅっと抱きしめた。一人じゃないことを伝えたい。だから、思わずやってしまった。

「ゆずかちゃんが今まで愛されなかった分は、私が愛す。倍にして愛す。ずっとずっと一番大切な友達。いや、違う。最高の真友。」

これは嘘じゃない。心の底から思っていること。きっと伝わったはずだ。

「ねえ、そうでしょ!!」

絶対にそうだ。そのはずだ。

「う、うん。一番に：一番大切な真友だよ。これからも：ずっと!!」

ガツと私の肩をつかみ、顔を合わせる。

「ありがとう。」

あの子は、ゆずかちゃんはうれしそうに笑い、うれしそうに泣いていた。笑った：笑ってくれた。その日、私は初めてあの子が笑ったところを見た。天使みたいなやさしい笑顔だった。

今私はいじめっこ3人組を前にして、堂々と立つ。息を吸う。

「これ以上、私をいじめるのはやめてっ。」

「いきなり何よ。」

「パシリが命令すんな！」

「これはおしおきだね。」

ぐいっと3人がせめよってくる。「やめて」そう言う前に林道さんはいすを：

「やめろっての。」

静かに響く声。あの子だ。

「何よ。文句でも？」

「なかつたら話しかけてないでしょ。」

「何それウザッ。」

「腹立つ。」

3人組は怒っている。

「ねえ、そっちはそっちでストレスたまつてイライラしてんのかもかもしれないけど、そういうのよくない。」

「何いい子ぶってんの。」

「いい子ぶるのなら、先生とか男子の前で普通するでしょ。」

「けんか売ってんの!!」

「売らないわよ。でも、結とは心友なの。守らないと。大切な人、傷つけないで。」

「何よエラソーに。」

「そーよ。生意気よ。」

「ねえ、どうして結をいじめるの？ なにかひどいことでもした？」

「そ、それは…。」

林道さんは少し赤くなる。

「…分かった。あなたの好きな人の好きな人が結だったんでしょ。違う？」

「そ、そんな訳ないでしょ!!」

「じゃあ、もういじめないでくれる結のこと。」

「っ好きにして!!」

林道さんは真っ赤になって出て行こうとする。二人もその後を追いかける。あつ待って。行っちゃったら、本当に言いたいことが言えない。

「あ、あの待ってください。」

三人組は振り返り、にらむ。

「あ、あのいじめないのなら、その、仲良くしてほしいです。本当は悪い人じゃないだろうし…だから、話しかけてほしいです!」

返事をしないで、「バカみたい」という顔をして出て行った。

「ゆずかちゃんごめん。ありがとう。」

「ううん、それより本当結いい子だね。」

笑っていた。やさしい笑顔だった。

引越しの日。私は東京に行く。私の世話をしたいと言ってくれた人がいたそう。父方の親戚で、ずっと外国に住んでいたらしい。子供が苦手なのに杉木さんが私を育てているときいて、「どちらも不幸じゃない!」と思い、私の世話をすると言ったようだ。自分から言い出してくれる人に会えるなんて思っていなかった。でも、どんな人なのかよく分からない。少し不安だ。杉木さんは、

「子供は苦手だが、東京よりこっちの方がいいと思ったら、帰ってきてもいい。」

やさしい声だった。おじさんは本当は子供が苦手なのに…きつと精一杯の言葉だったのだろう。おばさんも少し心配そうな目をしている。私は、杉木さんにも愛されていたんだ。

バスを待っている。隣には結がいる。目がぱんぱんにはれている。引越しのことを言うと、悲しそうに泣いたけど、言い出してくれる人がいたとうれしそうにもしてくれた。結がいる、一緒にいたいからここに残ろうとも思った。だけど、杉木さんに悪いと思った。だから、東京に行こうと決めた。結はあの3人組とも今は普通に話している。勇気を出して話しかけ続けた結はすごいと思う。

「また、遊びにくるよ。」

「いつでもきて!! ずっと待ってる。忘れないよ!!」

「うん、ありがとう。やっぱりちよつとさみしい。」

「ゆずかちゃん…私も…。」

「ねえ、今さらだけど、ゆずかちゃんじゃなくて、ゆずかでいいよ。」
「えっ今！」

「まあ、確かに。」

「ゆずか。」

「何？」

「変な感じする？」

「少しだけ。」

話しているとバスがきた。ぎゅつと抱きしめて、涙があふれた。大好きな人。また会えるけど、さみしい。

「またきて!!」

「もちろん、絶対に!!」

頑張って、笑って、さよならを2人で言った。でも、やっぱり最後は泣いてしまう。だって、幸せだから。

東京での生活に慣れて、1カ月。いろいろ大変だった。こっちで友達もできた。けっこう楽しい生活だったけど、今日は大切な人に会いに行く日。

いなくなってから、1カ月。さみしくてつらかったけど、今3人の友達がいる。勇気を出せてよかったと思う。そして、今日は大切な人が会いにくる日。

思いつきり笑おう。もう、笑えるから。

思いつきり泣こう。もう、泣けるから。

大切な人がいるから。

